



ショートコメント

★★★

Data 2024-35

劇場版 再会長江 THE YANGTZE RIVER

2024年/中国映画
配給: KADOKAWA/111分

2024 (令和6) 年5月3日鑑賞

テアトル梅田

監督: 竹内亮
出演: 江洪/蔣培清/楊芹会
/甄甄/茨姆/阿部
カ/小島瑠璃子

👁️👁️ みどころ

お笑い芸人が司会者を席捲するくだらないバラエティ番組ばかりのTV界にあって、良質なNHKのドキュメンタリー番組は異彩を放っていた。

その1つが『長江 天と地の大紀行』(11年)だが、その制作スタッフの一員だった竹内亮氏が、今や個人や番組、会社のSNSのフォロワー合計1000万人超を誇る映画監督として本作を大公開!

しかし、全編を通じて自分自身を“主役”のようにスクリーン上に登場させる演出スタイルは如何なもの?さらに、ドキュメンタリー番組としては十分な出来だったNHKの素材を再利用し、10年前に取材した人々を“再び訪れる旅の物語”と構成したのも如何なもの?そして、邦画が今、“劇場版”全盛時代になっているのは一体なぜ?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆日本のテレビ界は、お笑い芸人が司会者を席捲する状態が何十年も続いている。そんな、くだらない番組が氾濫する中で、私が「これは素晴らしい!」と思えるTV番組の一つがNHKスペシャルやNHKのドキュメンタリーだった。

『ガイアの夜明け』もその一つだが、私は『映像の世紀』『新・映像の世紀』『映像の世紀プレミアム』という『映像の世紀シリーズ』については、そのほとんどを録画して何度も見ている。NHKの『長江 天と地の大紀行』(11年)もその一つだが、それを制作したのが、当時NHKの番組スタッフの一員として活動していた竹内亮氏だ。

◆そんな彼は、2013年に中国人妻の趙萍さんと子供を連れて南京に移住し、映像制作会社「和之夢文化伝播有限公司」を設立し、2023年に『再会長江』を日本で初上映、そして2024年に『再会長江』を再編集した『劇場版 再会長江』を全国公開するに至った。

私は劇場公開前に同作をネット配信によってパソコン上で鑑賞する機会を得たが、約30分ほど鑑賞して失望したのは、本作が10年前に『長江 天と地の大紀行』で取材した中国

の人々を再び訪れる旅の物語という形に編集しているのはいいとしても、そこに竹内氏自身を登場させていることだった。ドキュメンタリー映画だからどんな作り方でも自由だし、監督自身が主人公になって登場してセリフを喋り、ストーリーを牽引してもいいのだが、これではまるで10年前にNHKの予算とNHKのスタッフで作った番組の二番煎じである上、本作は今や個人や番組、会社のSNSのフォロワー合計1000万人超を誇る竹内監督の自己アピールの映画になってしまっているのでは・・・？

◆そう思ってパソコン上での鑑賞を途中で中止し、劇場公開後も本作を見る気はなかったが、5月3日公開の『無名』(23年)が満席だったため、同じ時間帯に上映していた本作を代わりに鑑賞することに。本作には、10年前の『長江 天と地の大紀行』で、当時中国語が少ししか話せなかった竹内監督が取材した

- ①長江下流航路の貨物船の船長の江洪 (JIANG HONG)
- ②港湾労働者で、棒棒 (バンバン) の仕事をする蒋培清 (JIANG PEI QING)
- ③中国雲南省元謀県、長江沿いのイ族の村生まれの楊芹会 (YANG QIN HUI)
- ④長江の水源の1つである瀘沽湖のほとりで暮らす母系社会の伝統を受け継ぐ少数民族、摩梭 (モソ) 人の甄甄 (ZHEN ZHEN)
- ⑤雲南省シャングリラで暮らすチベット族の少女茨姆 (CIMU)

が登場するが、『劇場版』として大衆受けを狙ったためか、江洪、蒋培清のウエイトは低く、楊芹会、甄甄、茨姆という3人の女性との再会のウエイトが大きくなっている。また、本作冒頭には、竹内監督らが上海に招待したチベット族の少女茨姆の物語が少しだけ登場するが、本作ラストに向けてはそのストーリーが本作のクライマックスになっていくことになるほど、なるほど・・・。これが“大衆受け”を狙う(?)ドキュメンタリー映画監督竹内亮氏の編集方針・・・？

◆中国の長江といえば、本作でも紹介されているとおり、さだまさしの『長江』(81年)や、賈樟柯 (ジャ・ジャンクー) 監督のいくつかの映画が有名だ。そして、私は中国第6世代を代表する賈樟柯 (ジャ・ジャンクー) 監督の作る映画が大好きだ。『シネマ 34』では<4つの賈樟柯 (ジャ・ジャンクー) 監督作品>として『一瞬の夢 (小武/Xiao Wu)』(97年)『プラットホーム (站台/Platform)』(00年)『四川のうた (二十四城記/24CITY)』(08年)『罪の手ざわり (天注定/A Touch Of Sin)』(13年)を、『シネマ 44』では『山河ノスタルジア (山河故人/MOUNTAINS MAY DEPART)』(15年)を、『シネマ 54』では『帰れない二人 (江湖儿女/Ash Is Purest White)』(18年)を取り上げている。「三峡ダム」建設に伴う集落の消滅という深刻な問題を生々しく取り上げた賈樟柯 (ジャ・ジャンクー) 監督は様々な社会問題提起をしてきたが、それと対比して本作の出来は・・・？

2024 (令和6) 年5月9日記